

# 藤原俊成詠歌集成

——家集・定数歌の補遺として——

松野陽一

俊成に全歌集があつたら、といふ思ひを今迄何度となく感じてきたことであつたが、今のところその編まれる気配はなささうだし、さりとて己れにそれを編む資力もないことなので、日頃少しづつ書き留めたノートを整理することによつて、現在の段階でも多少は役にも立ち、将来の全歌集或は全集の下地ともなるやうに、彼の詠歌を集成したのが本稿である。紙幅に限界があるので極めて便宜的なものであり、疎略なものでしかないことを遺憾とするが、大方の御示教を得て徐々に補訂してゆきたい。

集成の方針としては、比較的、まとめて目に入りやすい次の資料（資料Ⅰと仮称する）を除いた他の文献（但、続長秋詠藻を除く）から俊成の詠歌を蒐集し、且、後述する資料Ⅱ以外の場合、資料Ⅰと重複せぬもののみを集成することとした。この理由は、専ら紙幅の限界によるものである。

資料Ⅰは次の十種である。

丹後守為忠朝臣家百首（群書類従、但、竜谷大図書館本が善本）

木工権頭為忠朝臣家百首（群書類従）

流布本長秋詠藻（国歌大観等）

為秀本長秋詠藻（古典文庫）

五社百首（群書類従）

長秋草（桂宮本叢書）

守覚法親王家五十首（近刊とのこと）

正治初度百首（統群書類従）

千五百番歌合百首（古典文庫・続々類従）

祇園社百首（西日本国語国文学会翻刻双書）

このうち、流布本長秋詠藻は、右大臣家百首、千五百番歌合百首、文治年間歌群を含むもので、且、久安百首、入内屏風歌の脱落歌はそれぞれの原典で補つたものである。続長秋詠藻（古典文庫本）を含めなかつた理由は、同書が本稿と同じ性格を持つたもので、基本資料とし難いからである。なほ、これら資料については、国文学「私家集のすべて」（学燈社昭和四〇年一〇月号）に若干の見解をのべてあるので参照されたい。

さて、資料Ⅰ以外の文献から蒐集した俊成の詠歌を三類に分けて扱つた。その第一は、俊成との贈答歌を載せてゐる私家集、記録類、出詠歌を載せてゐる歌合といつた、いはゞ一次資料である。なほ、判詞を付した際や、著述が成つた時の感懐の歌は、若干性格が異なるかと思

はれるので、敢て別項を設けてみた。これらを資料Ⅱと称するが、ここでは資料Ⅰとの重複を避けなかつた。これは、本来かうした性格の稿は網羅主義をとるべきであると考へるからであつて、将来、資料Ⅲ・Ⅳが本来の姿をとる時、Ⅱをそのままの形で生かしたいと考へてゐる為である。第二は、俊成自身の手になる勅撰集、歌合、及び彼の在世中に著された私撰集、私撰集的性格の歌合、歌学書等に載るものうち、資料Ⅰ・Ⅱと重複しないもので、これを資料Ⅲと呼ぶ。そして第三は、それ以外の全ての文献に記載され、且、資料Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと重複しないもので、資料Ⅳと称することとした。

今回、資料Ⅲ・Ⅳを作成する為に用ひた——つまり俊成の詠歌の載るⅠ・Ⅱ以外の全ての——文献は次の如くである。なほ、数字は、各文献の俊成入集歌数、ゴジツク体数字は、その中の資料Ⅰ・Ⅱと重複しない、本稿採録歌数である。

- 勅撰集 詞花集(1)、千載集(3・36)、新古今集(1・73)、新勅撰集(2・35)、続後撰集(28)、続古今集(2・27)、続拾遺集(2・22)、新後撰集(18)、玉葉集(2・59)、続千載集(1・20)、続後拾遺集(1・13)、風雅集(2・28)、新千載集(15)、新拾遺集(14)、新後拾遺集(9)、新統古今集(22)
- 私撰集 後葉集(6)、今撰集(11)、統詞花集(8)、月詣集(29)、玄玉集(56)、御裳溜集(16)、秋風集(21)、雲葉集(27)、万代集(39)、(39)、夫木抄(13・41)、拾遺風躰抄(8)

- 歌合 治承三十六人歌合(10)、慈鎮和尚自歌合(1・7)、三百六十六番歌合(3・39)、俊成卿百番自歌合(196)、時代不同歌合(3)

- 歌学書・その他 歌仙落書(1・15)、古来風躰抄(1)、無名抄(1)

- 5)、近代秀歌遣送本(7)、同自筆本(6)、定家八代抄(53)、秀歌体大略(7)、別本八代集秀逸(8)、百人秀歌(1)、百人一首(1)、定家十体(18)、今鏡(1)、平家物語(1)、古今著聞集(1・1)、自讃歌(10)

この他、中世の類題集等の私撰集、歌学書にも収載歌は多いが、調査の範囲では再載録歌なので割愛する。

なほ、俊成歌のみの歌頭に一連番号を付し(但、重複歌、作者存疑歌の別をつけてゐない)、\*印で私注を記した。

資料Ⅱ (162首)

(1)私家集 (54首)

清輔朝臣集 (類従本)

美福門院うせ給ひて後さるべき人々はみな色になれることを思ひて俊成のもとへ遣しける

人なみにあらぬ袂は変らねど涙は色になりける哉

かへし 俊成

1 墨染にあらぬ袖だに変わるなり深き涙の程を知らなむ

重家集 (古典文庫本)

二条院かくれさせたまひてのとし、九月十三夜月あかゝりしに左京大夫頭広のもとより

2 くものうへはかはりにけりときく物をみしよにゝたるよはの月かな

愚和

ありしよに月の光はかはらねどなみだにかくはくもりやはせし

三位したりしに右京大夫俊成もとより

3 くらゐ山たえぬおどろのみちなれどあとたがえずものぼりぬるかな

愚和

くらゐやままたえせぬあとをたつねつゝなをいやたかのみねにのほら  
ん

おなしとしの三月尽日右京大夫のもとへつかはしゝ

おもひいてもさらになかりしはるたにも今日のくるゝはいかゝおほえ  
し

返し 京兆

4 おもひいてははるならずともかさねてむ今日のおしさそ猶かきりな  
き

風情集 (古典文庫本)

左京大夫頭広がり梅の花おりてつかはしゝ人の枝につけて

むめがえの花につけてもおもひいてよとふことのはゝなき身なりとも  
かへし

5 はなみてもむかしのはるはわすれぬるとはれぬみとはたれにいふへ  
き

刑部卿頼輔集 (桂宮本)

同日 (三位したるのちのあした) 入道三品俊成卿のもとよりつかは  
せる

6 またたれどもつみにさきけるふちの花ひさしくにはへこすゑはるかに  
返歌

としをへて松にかひあるふちの花こすゑはるかにたのもしきかな

皇太后宮亮経正朝臣集 (桂宮本)

皇太后宮大夫俊成卿のもとへ百首歌みせに遣とて

うえおけるかひやなからんもゝくさの花はにほひもあらしとおもへは

返し

皇太后宮大夫俊成卿

7 うへをきしむかしのあきのことたえすふかくそはなのいろはみえけ  
る

平経盛卿詠 (古典文庫本)

雪のふり侍しあした左京大夫のもとへつかはしける

雪ふればわか身のほとそおもひしるふみわけてとふ人しなれば

かへし 左京大夫俊成卿

8 ふりはつるうき身は雪ぞあはれなるけふしも君がとふにつけても  
皇后宮大夫俊成卿のもとへ哥合を判ぜさせにつかはしたりしが判詞  
つかはすとておくに書つけて侍し

9 和歌のうらにとどむるあとをおもふ哉けふのみるめは猶ぞつきせぬ  
かへし

わかぬ浦にあとをとどむる浜千鳥みるめかひある心ちこそすれ

入道大納言資賢卿集 (類従本)

おなしころ一条三位入道の許へ

今はさは君しるへせよはかなくてまことの道に惑ふ我身を

返し

10 言のはゝおほえの山と積れ共君がいく野はひこそちらさらね

\*この「おなしころ」とは前歌に「丹州にこもり居るとき」とあるので治  
承三年十一月の清盛のクーデターで資賢が翌四年七月まで丹波にぬた  
(公卿補任)時の詠であらう。この集は寿永元年八月六日の奥付を持ち、  
その時の自撰成立本と推定され、表記はその時点以前と考へられる。と  
すると「一条三位入道」の該当者は見当らず、「一」は「五」の誤写と  
推定されるので、疑を残しながらもこゝに載せておく。

林下集 (歌学全書本)

雪ふりし朝に三位俊成の卿のもとより申し送りたりし

11 けふにもし君もおとふとながむれば又跡もなき庭の雪かな  
かへりこと

今そきく心はあともなかりけり雪かけわけて思ひやれとも

年の暮に左京大夫俊成のもとへ申し遣はしける

年くれぬとおのくいそぐ道ならで和歌の浦にもゆく心哉

返事

12 年くれておいゆく末を思ふにもわすられめやはわかぬ浦波

俊成卿おもくわつらひて九月尽おくりたりし

13 昔より秋のくれをばをしみしを今年に我そさきたらぬべき

返事

霧はれぬ心なりともとまりて後の秋をもをしめと思ふ

源氏集を皇后宮大夫俊成卿にかりてかへしおくるとてかき侍りし

世の中の色なる水を厭へどもなほみなもとのうちに染ぬる

かへし

14 色を厭ふ法のみなもと尋ぬればそむる心ぞさととりともなる

大将になり侍りし時俊成入道の申しおくる二首

15 雪のうへや近きまもりと成ぬれば星の位もうたがひぞなき

16 三笠山さしのぼりぬるうれしさをあはれ昔の人に見せばや

返歌

登るべきほしの位のまちかさに雲の上までひかりをぞさす

なきかげもいかにうれしと思ふらん吹伝へたる三代の春風

栗田口別当入道集 (桂宮本)

三月尽日俊成卿のもとへ月日のむなしくするはかなざなと申て

春としもする月日はおもはねとあやしやけふをくらすころは

返事

17 おもふらんころをかへておもひやれむそちにかゝるはるのゆふへ

を

皇太后宮大夫俊成卿うちきく撰すときくしかは

もしほ草かきあつむなるわかうらのその人なみにおもひいてすや

かへし

18 いまもなをなれしむかしはわすれぬをかけさらめやはわかぬうらな

み

山家集 (古典大系本)

左京大夫俊成歌集めらるゝと聞て歌遣はすとて

花ならぬ言の葉なれとおのつから色もやあると君拾はなん

かへし 俊成

19 世を捨てて入りにし道の言の葉ぞあはれも深き色も見えける

聞書集 (古典大系本)

五条三位入道のもとへいせよりはまゆふつかはしけるに

はまゆふに君がちとせのかさなればよにたゆまじきわかうらなみ

かへし 釈阿

20 はまゆふにかさなるとしそあはれなるわかうらなみよにたえすと

も

五条の三位入道そのかみおほ宮のいへにすまれけるをり寂然西住

なんどまかりありて後世のものがたり申けるついでに向花念浄土

と申ことをよみけるに

心をぞやがてはちすにさかせつるいまみる花のちるにたぐへて

かくてものがたり申つゝ連歌しけるにあふぎにさくらをおきてさ

しやりたりけるをみて 家主頭広

21 あづさゆみはるのまどみに花ぞみる

とりわきつくべきよしありければ

やさしことになほひかれつゝ

小侍従集 (古典文庫本)

かくて後さまかへて八幡にこもりたるに都より人々あまた歌をく

られたり 五条三位俊成

22 かのきしにわたりにけりなあまを舟すまはあふ瀬を思しものを

これか返しとはなくてこまかなることとの返事のおくに

すみし世にあふ瀬なかりし石清水おりうれしくそ思ひいてたる

隆信集 (類従本)

みなみおもてのむめのはなさかりにさきたるを見るにつけてもこ

そのはるよはひのほともしらすみてうへさせもてけうしなとせら

れしおもかけもいまのこちして花のえたにむすひつけし

墨染の袖こそあらめむめの花かはらぬ色をみるさへそうき

三位入道これを見給ひて

23 春雨にしほるゝ花もすみそめにかはれる袖を哀とやみる

五条三位入道むかしはまことのおやにもまさりてこゝろさしあさ

からすたのみきこえしをやうくとしつもりてのちはゝなどともな

くなり侍りてかの入道もやそちにあまりわが身もまたむそちにあ

まりてのち世をのかれて侍しにいとあはれにむかしいまのことな

とねむころにかきつゝけられてせめての心さしのあまりに哥に一  
句をそふるよしなと侍りて

緑児と思ひし人も老ぬとて背く世を見る悲しさは夢か現か

かへし

24 有てなき夢も現も誰にかく問れまし君かみるよに背かさりせは

このかむるいつきせずをさへかたきあまりにこれよりかへしのお

くにかきそへ侍りし

諸共にとはます人もなき跡に君独哀かくるも夢かとそ思ふ

かへし

25 諸共にあらまし人のなき跡の悲しさは夢ち計りにあふをまちつゝ

世をそむきて侍しを五条の三位入道の夢かうつゝかなと侍しあは

れはなをつきせぬこゝちしてそのゝちふつかみか有て申をくりし

しのふ草 しけりのみます むかしにや うき世のほかは かよふら

ん いてにしいへの ふることの のこるくまなく いまさらに 露

と消にし おもかけも あとにとまれる ことのはも 袖のみぬれて

かなしきを 有ともなくて あり明の あかしかねつゝ 秋のよも

やゝくれかたの 虫の音を ともとたのみて なくさむる こゑのい

るさへ よはりゆく 心ほそさは さゝかにの いとひても猶 いと

ふへき うきよにかくて すみそめの 衣はかりは そめつれと は

れせぬきりに むせひつゝ なかき夢路の さめぬまを 今はむみや

うの くも消て こゝろの月も はれよとや おなしはらずを ねか

ふへき さとりあらわす 君かことのは

ひらくへきさとりや近く成ぬらんさらに昔の夢そかなしき

三位入道かへし

26 あさちふの 露けきやとに なかめつゝ 秋のくれにも 成ぬれば  
 たゝおほかたの ころたにも なくさめかたき よのなかを そむき  
 にけりと きくときは いかばかりかは 哀おほき ましてうちはへ  
 こひわたる むかしのことを しのふ草 かけてしのへる ことのは  
 ㄱ かきなかしける 水くきの あとことにこそ かなしけれ 思へ  
 はひさし 契ありて なれにし程を かそふれば いそちもすきし  
 はるのそら 立わかれにし かすみより えたをわかるゝ 花につけ  
 夏にもなれば 軒ちかき 花たちはなの かほるかに むかしの袖を  
 よそへつゝ まとろむときは おもひねの ゆめしにのみそ (ちみ) なくさ  
 むる 秋の月には さらしなや 更にもいはす をはすての 山より  
 出てゝ 山のはに いらぬるかけを こひかねて すくる月日をお  
 もふには とゝせの秋に なりぬれと こふるころの はかなさは  
 きふけふとそ まよはるゝ かゝるなげきも これはみな はかな  
 き夢の まとひなり 今はひとへに ねかはくは はちすのいけに  
 ふくあめに うあの思ひを ひるかへし こゝろをふかく すましつ  
 ㄱ さとりひらかむ ことをしそ思ふ

(反歌欠)

秋篠月清集 (古典文庫本)

雪朝三位入道もとへつかはしける

わけくへき人なき宿の庭の雪にわか跡つけて君をとふかな  
 君かすむ松の戸ほその雪のあしたなをふりゆかん末をこそ思へ

返事 入道釈阿

27 きみかたとふ跡つけそむるはつ雪をつもらむすゑまたのまるる哉

28 ふりはてゝゆきゝえぬとも君か代を松のとほそは猶尋みよ

皇太后宮大夫入道かもとへ消息して侍りし返事にかけいひつかは  
 したりける

29 秋の色 こい ときすてゝし谷のむれ木をうれしくもとふ松の風かな

返事

きみをとふかひなきころの松のかせわれしも春をよそにきく哉

権中納言道家母うせたまひてのちおなしころ三位入道のもとより

30 かきりなきおもひの程の夢のうちはおとろかさしとなげきこし哉

返事

みし夢にやかてまきれぬ我身哉 こそイ とはるゝけふはまつかなしけれ

拾玉集 (国歌大観本)

俊成入道此の百首を見てよめる

31 神もいかに心にそめて照けむ御法の後の言の葉の色

返しに

法の末を今こそ神も照らめ君が副つる言の葉を見て

\* 建久三年九月「秋日詣住吉社詠百首和歌」

俊成入道見此百首奥和

32 尚たのむ高間の弓を放ちける手もとに響く密箭の音

\* 建久五年南海漁父、北山樵客詠百首和歌

建久二年九月如法経かきて天王寺太子の御墓などに詣でて其の次  
 でに住吉に詣でて八月一日住の江殿にて百首よみてたてまつりみ  
 な住吉住江の詞をおけり歸りて尋常の料に左大将殿にかゝせ奉り  
 て宝殿にこめむとする間に草本を俊成入道見て点どもあはせ奥に  
 かきつけたる

入道釈阿

33 神もいかに心に染て照しけむ御法の後も言の葉の色  
返し

法の末を今こそ神も照すらめ君が添つる言の葉を見て

同じ十月に初雪ふれる朝山へのほると聞きて同じ人の許より消息

したりける次にかくなむ

入道釈阿

34 都だに初雪ふりぬ山のおく冬の奥をも思ひやるかな

かへしに

冬の奥を厭はぬ宿の初雪は心の底に消えぬとを忘れ

同じ十一月晦日山の座主事仰せられたりし時住吉の百首のことな

ど思ひ合はすとて俊成入道の許より雪の降りたる朝にかくいへる

十二月九日

35 峯の雪心の底を聞きし時山の主とはかねて知りなき

猶々同時御慶旁重畳之条更々非申限候とて又

36 日吉のや杉の印と更にいはずをり哀れなる住吉の松

返しに

いざや雪頭の上につす迄山の主とも思ふへき身か

今こそは思ひ合はすれ日吉のや杉のしるしも住吉の夢

建久四年俊成入道の許へ情思禪門長此道欲貽十首贈答於後代よし

申し遣すとて十月下旬有明の月いつよりもめでたかりしを詠めて

風情あまた出で来たればかつは空しくはいかがとて遣す

夜を重ね西へと急ぐ月影を打詠めてはなむあみだ仏

霜かかる籬の薄秋にかへて同じみ空の月を見るかな

秋の月の残る袂に月さえて庭の小萩は本つ葉もなし

紅葉吹く風の便りに月おちて霜にうらある庭の面哉

音づるるたのむの雁も声なれて哀を返す冬の夜の月  
冬ぞかし糸ゆふ遊ぶ春の空の面影までにすめる月影

我が物と千里の氷げにしきて冬こそ月の栖なりけれ

神無月木の下蔭もなき空を有明さまに詠め入りぬる

疎からぬ色をかさねて詠むれば月影うつむ雪の有明

我がよふけて詠むと君や思ふらん尚長夜は有明の月

返し

俊成入道

37 夜を重ね西に傾く月を見て幾返りかはなむあみだ仏

38 霜枯の浅茅が庭は荒果てぬ同じみ空の月はすめども

39 秋過て霜おき増る莓の袖に月宿らずば如何に我せむ

40 聞にさへ涙ぞこぼる木葉落て霜にうらある庭の月影

41 いつまでとたのむの雁を思ふにも泪連る冬の夜の月

42 浮かれ遊ぶ糸ゆふ迄も哀也又やは春の空を見るべき

43 こほりしく千里の月を詠めても冬ぞ泪の限なりける

44 思ひやれ木の葉もすてゝちる庭を独詠めて有明の月

45 冬の月も幾返りかは見つれ共尚身にしむは雪の有明

46 思へ唯八十の秋を詠め過ぎて今までかくて有明の月

忽預十首嘉什一候之条此道面目何事過之候哉とて殊に悦びた

りき有興有感ノ

同じ年(建久六年)俊成入道成家の朝臣中将になさむこと殿に申せ

とて

47 敷島や道を尋ねば三笠山なかの跡しも隔てやはせむ

建礼門院右京大夫集 (古典大系本)

建仁三年のとし、霜月のはつかあまりいくかの日やらん、五条の

三位入道<sup>俊成</sup>九十にみつときかせおはしまして、院より賀たまはするに、おくり物の法服の装束のけさに歌をかくべしとて、師光入道の女宮内卿のとのに歌はめされて、むらさきのいとにて、院のおほせ事にて、おきてまゐらせたりし

ながらへてけさぞうれしき老の波やちよをかけて君につかへん  
とありしが、給たらん人の歌にては、今すこしよかりぬべく、心のうちにおぼえしかども、そのまゝにおくべきことなれば、おきてしを、けさぞのぞ文字、つかへんのむもじを、やと、よとになるべかりけるとて、にはかにその夜になりて、二条どのへまいるべきよし、おほせ事とて範光の中納言の車とてあれば、まゐりて文字二おきなほして、やがて賀もゆかしくて、よもすがらさぶらひてみしに、むかしのことおぼえて、いみじくみちのめんぼくなのめならずおぼえしかば、つとめて入道のもとへそのよし申つかはす

君ぞなほけふより後もかそふべきこのかへりの十のゆく末

返事にかたじけなきめしに候へばはうくまゐりて人めいかはかりみぐるしくとおもひしにかやうによるこびいはれたるなほむかしの事も物のゆゑもしるとしらぬとはまことにおなじからずこそとて

48 亀山のこゝのかへりのちとせをも君が御代にぞそへゆづるべき

壬二集 (国歌大観本)

建仁二年六月の頃嘆くこと侍りしに三位入道の許より

49 藤衣きしは昨日と思ひしを又やは袖をなほ絞るらむ

返事

限あらば又もやぬはむ藤衣とふに涙の果ぞ知られぬ

なほ添へて今一首を

波に迷ふ藤江のあまの藤衣いかで玉藻の光さすらむ

返事

50 玉ならぬ藻汐の草も争でかは藤江の波にとはで過べき

後鳥羽院御集 (類従本)

建仁三年定家朝臣中将のこと申すとて父の入道詠みてたてまつり

し

51 をざさ原風待つ露の消えやらでこのひとふしを思ひ置くな

御返し

小篠原変らぬ色のひとふしも風待つ露にえやはつれなき

その頃老の病せめていかならむと聞えしほどよりつかさめしの際にも侍らさりしかばとかくの御返りごともなかりけるとかやほど経てつかさめしあるべしなど聞えしにむすめの申し驚かされたりけるにかくなむおほん返りごとあり

拾遺愚草 (藤原定家全歌集本)

母のおもひに侍し年のくれにひえの山にのほりて中堂にこもりて侍し春の始もわかれすかつふる雪にあとえたりしあした入道殿山のおほつかなさなとこまかにかきつゝけ給ておくに

52 子を思心や雪にまよふらん山のおくのみ夢に見えつゝ

53 みたひおかみひとたひたてしおのゝををいまきく許思やる哉

御返し

うちもねす嵐のうへのたひ枕みやこのゆめにわくる心は

おのゝをとをたてしちかひもいさきよく雪にさえたるすきのしたかけ  
秋のわきせし日五条へまかりてかへるとて

たまゆらのつゆもなみたもとゝまらすなき人こふるやとの秋風

返し 入道殿

54 秋になり風のすゝしくかはるにもなみたのつゆそしのにちりける

(2) 日記 へ7首

源家長日記 (古典文庫本)

(定家還昇の件)

(前略)殿上はなたれて侍けるつきのとしの春、ちゝの入道のよみ  
て後白河法皇に奉られたる歌付き

55 芦田鶴の雲路まよひし年くれてかすみをさへやへたてはつへき

「返事せよ」とおほせこと有ければ参議定長

あしたつはかすみを分て帰るなりまよひし雲路今日やはる覧

かくて還昇せられてのち、よのかはる事有てかきてもられ侍き。

(定家昇進の件)

定家朝臣の中將の事申とてちゝの入道のよみて奉られたりし歌

56 小篠原かせまつ露の消やられて此ひとふしを思ひおくかな

其比老の病せめて、いかならんとときこえしほとなり。つかさめし  
のころにもはへらさりしかは、とかくの御返事もなかりけるにや、  
程へてつかさめし有へしなと聞えしに、むすめの申をとろかさされ

たりけるに、御返事かくなん。

をさゝはらかはらぬ色の一ふしもかせまつつゆにこやはつれなき

そのたひとけられ侍にき。

(九十賀の件)

(釈阿)

57 もゝとせも過行人そおほからん万代ふへき君かみよには

58 万代のはしめを君にはしめてもあかぬ心にははふけふかな

59 行末のよはひは心君かへむちとせをまつのかけにかくれて

事はて、暁かたにをのゝまかりいつ。をかれたるほうふくつゑ  
など、つきの日あしたにおくりつかはす。御使秀能なり。御かへ  
りかくそうせられて侍し。

60 此つゑは我にはあらずわか君の八百万代のみねのため也

61 君か代はこけのいはほやなてはてんそらよりおろす羽衣のそて

「かへしせよ」とおほせられしかば、

やをよるつ尽ぬ雲ぬのみねの杖なをさかゆかんみちのため也  
なてはてんこけの岩ほをためしにてちよもかさねよ天の羽ころも

(3) 歌合 へ77首

住吉社歌合 (嘉応二・一〇・九)

社頭月

62 こころなきこころもなほそつきはつる月さへすめる住吉の浜

旅宿時雨

63 あはれにも夜半にすぐなる時雨かな汝もや旅の空にいでつる

述懐

64 いたつらにふりぬる身をも住吉の松はさりとあはれ知るらむ

建春門院滋子北面歌合 (同・一九)

関路落葉

65 色々の木の葉に道もうつもれて名をさへたどる白川の関

水鳥近馴

66 君が代をのどかなりとや水鳥も玉の汀につばさ敷くらむ

臨期違約恋

67 思ひきや櫛の端書かきつめて百夜もおなじまる寝せむとは

広田社歌合 (承安二・一〇・一七)

社頭雪

68 いさぎよき光にまがふ塵なれや御前の浜につもる白雪

海上眺望

69 わたのはら漕ぎはなれぬる船路には心もえこそつながざりけれ

述懐

70 ちはやぶる神に手向くる言の葉は来む世の道のしるべともなれ

別雷社歌合 (治承二・三・一五)

霞

71 杣下し霞棚引く春くれば雪消の水も声あはず也

花

72 身にしめしその神山の桜花雪ふりぬれどかはらざりけり

述懐

73 たちかへりすてし身にも祈るかな子をおもふ道は神も知るらむ

右大臣兼実歌合 (治承三・一〇・一八)

霞

74 山たかみ峰のかげぢを見渡せば岩も霞にうつもれにけり

郭公

75 過ぎぬるか夜はのねざめの郭公こゑは枕にあるこちにして

紅葉

76 しくれゆく空だにあるを紅葉ばの秋はくれぬと色にみすらむ

雪

77 たづぬべき友こそなけれ山かげや雪と月とをひとり見れども

恋

78 あふ事は身をかへてもまつべきによよをへだてむ程ぞかなしき

述懐

79 かきつめておもふもかなし藻塩草しづみはてにし名こそ惜しけれ

\* 新古今(花)

(80) 春来ればなほこの世こそ偲ばるれいつかはかかる花を見るべき

\* 異本長秋詠藻(旅)

(81) わたのはら雲の五百重にいでにけり浪のいろはの山やいづかた

民部卿経房歌合 (建久六・一・二〇)

山花

82 風かほる春のにしきにまかふ哉花ちるころの志賀の山こえ

初郭公

83 なにたてる時の鳥とやいつしかとう月きぬとて初音なく覽

曉月

84 今もなをなくさめかねつ秋の月あり明かたの更科のさと

深雪

85 ほのみゆる梢はそれか初瀬山雪のあしたのふたもとの杉

久恋

86 ふりにけりとしまのあまの浜ひさし浪間に立もよらまし物を

当座歌合 (正治二・九・三〇)

月契多秋

87 君がへん千とせの秋にあはむとは月こそ空におもひ置けめ

暮見紅葉

88 立田姫人の心にそめさせよみちのしたに宿はかさなん

曉更聞鹿

89 たのめけん妻よいかにそさをしかのこの山辺のさをしかのこゑ

御室撰歌合

春

90 むめかかも身にしむころは昔にて人こそとはね春のよの月

夏

91 にほひくる花たちはなの袖の香に涙露けきうたゝねの夢

92 このまゝに後の世までも時鳥かたらひなるゝ友となりてよ

秋

93 植置きし萩のさかりをみつる哉おもふにかなふ事もありけり

94 秋の野よいかに心を分よとて千種の花に鹿の鳴らむ

95 月をおもふふかき心を照し見よをはらん雲も我まとはする

冬

96 ひとりみる池の氷にすむ月のやかて袖にもうつりぬる哉

雑

97 君か代は高野の山の岩の室あけん朝の法にあふまで

98 恋しさもかなしき中に悲しきはあはれをかけし白川の浪

土御門内大臣(通親)影供歌合 (建仁元・三・一六)

梅香留袖

99 梅がゝになれぬる袖をかたしけば夢もむかしの春の夜の夢

翠柳誰家

100 春ふかき梢のいろのみとりよりやどのをこそはとはまほしけれ

水辺躑躅

101 まきくだす杣やま河の岩つゝじいかだのここはこれやともし火

故郷疑冬

102 ふりぬれどよし野の宮は河きよみ岸の疑冬かげもすみけり

雨中藤花

103 はるさめのあまねき時は藤花しづ枝をわくるむらさきの雲

山家暮春

104 かへる春いづかたならんうくひすの谷のふるすにとなりしむ也

新宮撰歌合 (建仁元・三・二九)

嵐吹寒草

105 をさゝ原夜半のあらしは払へとも葉分の霜は猶むすひけり

雪似白雲

106 故郷はさゆる雲とやみよしのよしのゝおくの峯のしら雪

逢不遇恋

107 泊瀬河又みんとこそたのみしか思ふもつらしふたもとの杉

鳥羽殿影供歌合 (建仁元・四・三〇)

暁山郭公

108 ほとゝきすしばしかたらへをとめごが袖ふる山の明方のこゑ

海辺夏月

109 月影もあかしの秋にちかきかなすまのたまやの有明の空

- 忍恋
- 110 忍びわびぬしのだの杜のわれならば袖のしづくもつゝまざらまし  
影供歌合 (建仁元・八・三)  
初秋曉露
- 111 秋きぬと枕につくるかねのをとにやがてもかゝる袖の露哉  
関路秋風
- 112 時しもあれ秋の旅ねをすまの関身にしむ風のかへる白波  
旅月關鹿
- 113 船とむるあかしの月の有明に浦より遠のさほしかのこゑ  
故郷虫
- 114 むかしだにまかきものらと成し跡にたれまつ虫の今も鳴覽  
初恋
- 115 覚束なはつとやたしのかたかへりかりはのをのゝ恋の行末  
久恋
- 116 契りしものをいはのまつつる巢くふ迄成にける哉  
八月十五夜撰歌合 (建仁元)  
月前松風
- 117 月の影しきつの浦のまつかぜにむすぶ氷をよする浪哉  
海辺秋月
- 118 たとへてもいはんかたなし明石かた秋のもの中の波のうへの月  
湖上月明
- 119 にほてるや月の氷はしかの浦に猶さゝ波のかすは見えけり  
古寺残月
- 120 又たくひあらしの山のふもと寺杉のいほりにありあけの月

- 河月似氷
- 121 千鳥なく河かせさむみ月さえて氷は秋のものにそ有ける  
石清水社歌合 (建仁元・一一・二八)  
旅宿嵐風イ
- 122 山路ゆくかりのいほりをとふあらしなきをそたのむたびの友とは  
\* 夫木抄 (月前雪)
- (123) さゆる夜の月の空よりふる雪はひかりのやかてつもるなりけり  
\* 同 (社頭松)
- (124) 君か代を祈るしるしはみつかきやおひそふ松のいく千世かへん  
影供歌合 (建仁二・五・二六)  
曉聞郭公
- 125 あはれいかゝおりしもきつる郭公雲間の月の有明の空  
松風暮涼
- 126 夕かせの枝しつかなる松かけにかねてしらるゝ千代の秋哉  
遇不会恋
- 127 浅ましやかへてしやまは山城のゐての玉水何むすひけん  
影供歌合 (建仁三・六・一六)  
草野秋近
- 128 草ふかき野原の露はしげけれどまだ吹わけぬ葛のうら風  
水路夏月
- 129 夏の夜のふけのわたりに月さえていは浪すどしうぢの川舟  
雨後聞蟬
- 130 むら雨のすぎぬる空のやまかげにあはれそふなり日ぐらしの声

八幡若宮撰歌合 (建仁三・七・一五)

(野徑月)

131 露ふかきみやきか原をしほれ行月すむ袖に萩か花すり

(海辺雁)

132 今そしる秋は南にゐる雁はあかしの沖の月になくなり

(霧中暮)

133 しばしだにいかで都をわすれまし秋の夕のしほかまのうら

(山家松)

134 いまはとてつま木こるへき宿の松千世をば君と猶いのる哉

135 山ふかくのかれはてたる身にし猶心をさそふまつの風哉

春日社歌合 (元久元・一一・一〇)

落葉

136 八重さくら木葉ちりてもかすか山にしきのぬさを手向してけり

曉月

137 かすならぬ末まで心はるけなむたにの小川に有明の月

松風

138 君が代はやをよろづ世とさしつ也みかさの山のみねの松風

(4) 著作・判に際しての歌〈24首〉

広田社歌合

139 敷島や道はたがへずと思へども人こそわかね神は知るらむ

三井寺新羅社歌合

140 和歌の浦の浪にくちても年を経ずば新羅の神に知られましやは

右大臣兼実歌合

141 和歌の浦に猶たちかへる老の浪しげき玉藻にまよひぬる哉

返し 右府(兼実)

老の波ひかりをよする和歌の浦の月に玉藻もみがかれにけり

玉葉 (治承三・二一・三〇)

俊成入道之許送消息二筆、為謝一日之遺味二也、其次和歌抄物、

為三券契可伝受之由、示送、報状云、

142 ふりにけるこのしたみづのあさければかきつたふべきことのはぞな

き

返歌

ちぎりをばあさからずこそむすびしかこのしたみづのなにとよむらん

同 (元暦元・一一・二九)

俊成入道昨日和歌等付勝負返送、其次詠一首副之、其詞云

143 くれはつるまつのとほそのゆきのうちをはるこそしらねきみたにも

とへ

返歌云

ゆきのうちはいつこもおなしさひしきさそわかやとつてもはるをしるか

は

\* 廿八日、(前略)法印(慈円)去比仰小僧、密々所詠哥等、遣

俊成入道之許、令付勝負、返事云、和歌判起請了、然而於

仰者、不可准他、仍可付勝負、明日可返上云々。

\* 玄玉集卷五「時節下」にもあり

千載集奏覧本箱書歌 (写本識語)

144 和歌の浦に千々の玉藻はかきつめつよろつ代までに君が見むため

145 後の世もなおたのむかな君か世にあへるは法のうき木とおもへば

御裳濯河歌合

まことにや。この歌はじめに「百枝の松に」と侍るは。愚和歌歌  
るにやとて

146 藤なみも御裳濯河のすゑなれば下枝もかけよ松の百枝に

147 契りおきし契のうへにそへおかむ和歌の浦路の蟹の藻塩木

148 この道の悟りかたきを思ふにも蓮ひらけばまた尋ねみよ

副送二首 (西行)

和歌の浦に塩木重なる契をばかける焚く藻のあとにてぞ見る

悟り得て心の花しひらけなば尋ねぬさきに色ぞ染むべき

\* 長秋詠藻・新勅・風雅・夫木にもあり

六百番歌合 (岩波文庫本)

149 住吉の松はあはれもかけやせむ八十過ぎぬる和歌の浦波

女房(良経)

和歌の浦のしるべとなれる老の波げに住吉の松も知るらん

民部卿経房歌合 (類従本)

150 もしほ草かきをく跡のきえさらばあはれほかけよ和歌のうらなみ

古来風躰抄 (歌学大系初撰本)

151 なみのおとはあはれときけどわかのうらの風のすがたをたれかしる  
らん

152 あはれてふ人はなきよにすみよしのまつやさりとわれをしるらん

慈鎮和尚自歌合 (類従本)

大比叡

153 身のうさはひよしの山も雲やおほふ心の闇になをまよふらむ

小比叡

154 深山河はやきしるしをたのむとてたにのつらゝのなをむすふらん

聖真子

155 いかにも西にこゝろはかくれともなをたちかへるしかのうらなみ

八王子

156 うくひすのえたのうつりにまよふかなれたる木たに花はさけとも

客人

157 よるの鶴かた／＼おもふ籠のうちをかたちをわけてあわれともみよ

十禅寺

158 うけかたきうき身なりとてまよはするみのりの月のいりかたのそら

三宮

159 夢にまよふ心のやみもあはれかけてかならずさそへにしにゆく月

後京極殿(良経)御自歌合

160 結びをくことは露のいかなれはさのみは玉の声ゆらくらん

依仰乍恐注付之、老比丘釈阿生年八十五

(良経)

161 玉ならぬことはも君にみかゝれてとまらん代々の光とそなる

162 正治奏状 (静嘉堂本)

和歌のうらのあしへをさしてなくたつもなとか雲井にかへらさるへき

資料III (8首)

歌仙落書

二条院うせ給ひて後九月十三夜の月くまなかりけるに女房の中に

申しつかはしける

163 雲の上はかはりにけりと大きくものをみしよに似たる月の影かな

\* 治承三十六人歌合・新千載集にもあり

千載集

(題しらず)

164 春の夜はのきはの梅をもる月の光もかをる心地こそすれ

\* 保延のころをひ (天理本)

今上の御時五節の程侍従定家あやまちあるさまに聞しめすことありて殿上のぞかれて侍りけるそのとしも暮れにける又の年の弥生のついでたち比院におほむけしき給ふべきよし左少弁定長がもとに申し侍りけるにそへて侍りける

165 あしたづの雲路迷ひし年暮て霞をさへやへだてはつべき

この由を奉し申して侍りければいとかしこく哀れがらせおましまして今ははや還昇位を下すべきよし御けしきありて心はるゝよしかへし仰せつかはせと仰せ出されければよみて遣はしける

藤原定長朝臣

昔たづは霞をけて帰るなり迷ひし雲路けふやはるらむ

この道の御あはれびむかしの聖代にもことならずとなむときの

人申し侍りける。

おなしき社(賀茂社)の後番の歌合の時月の歌とてよめる

166 きふね川玉ちる瀬々のいはなみに氷をくだく秋の夜の月

慈鎮和尚自歌合

小比叡三番右

167 又や見むかたのゝみのゝ桜かり花の雪ちるはるのあけほの

\* 新古今集114 詞書には「摂政大政大臣(良経)家に五十首歌よみ侍りける時」とあり。

三百六十番歌合

春五十番 右

168 春くれば猶この世こそ忍ばるれいつかはかゝる花をみるべき

冬三十三番 右

169 さもこそは庭の木のはにうつもれん苔おひにけり松のした道

冬四十七番

170 たとへてもいふかたもなき玉つしま千鳥なくける有明の空

資料IV (28首)

(1) 勅撰集

新古今集

(としの暮によみ侍りける)

皇太后宮大夫俊成女

(171) 隔て行くよゝの面影かきくらし雪とふりぬる年の暮かな

\* 一本に「俊成」とあり。

新勅撰集

恋歌よみ侍けるに

172 みしめひきうつきのいみをさすひよりこゝろにかゝるあふひくさか

な

世をのかれてのち、栖霞寺にまうてゝかへり侍けるに、大内の花のこすゑさかりに見え侍けるにしのひてうかゝひ見侍て頼政卿許につかはしける

173 いにしへのくもぬのはなにこひかねて身をわすれても見つるはるか

な

返し 従三位頼政

雲井なるはなもむかしをおもひいてはわするらむ身をわすれしもせし

続古今集

題しらず

174 郭公待つ夕ぐれの村さめは来ななぬさきに袖ぬらしけり

寄松恋を

175 ふりにける河原の上の松の根の深くはいかゞ人を頼まむ

続拾遺集

前右近中将資盛の家の歌合に五月雨

176 五月雨は雲間もなきを河社いかにころもを篠にほすらむ

\* 夫木抄にもあり

五社に百首の歌よみて奉りける頃夢の告あらたなる由しるし侍る

とて書きそへ侍りける

177 春日山たにの松とは朽ちぬとも梢にかへれきたの藤波

\* 其後年をへて此かたはらに書きつけ侍りける

前中納言定家

立ちかへる春をみせばや藤なみは昔はかりの梢ならねど

同じくかきそへ侍りける

前大納言為家

言のはのかはらぬ松の藤浪に又たちかへる春をみせばや

三代の筆の跡を見て又かきそへ侍りし

前大納言為氏

春日山いのりし末の世々かけて昔かはらぬ松のふちなみ

玉葉集

山家五月雨という事を

178 都人こともやとふとまつのかど雲とちはつる五月雨の空  
旅の歌の中に

179 仮初と思ふ旅寝のさゝの庵も夜や長からむ露の置きそふ

続千載集

一品経を書写山に贈るとて添へて侍りける歌の中に

180 種蒔きし心の水に月澄みてひらけやすらむ胸のはちすも

続後拾遺集

夜思瞿麦と云ふ事を

181 草枕たひねの程もいかならむ宿に見置きしとこなつの花

風雅集

和歌所にて暮山遠雁と云ふ事を講ぜられけるに

182 小倉山ふもとの寺の入相にあらぬ音ながらまがふ雁がね

月前旅を

183 清見瀉波をかたく旅ごろも又やはかゝる月を来て見む

(2) 私撰集

夫木抄

卷四花

嘉応元年成範卿家歌合判歌

184 さらぬだにひとすぎがたき清みがたなみの関路に花やちるらん

185 しら河のせきにちりしく花みれば苔のむしろはうつもれにけり

卷七卯花

田家卯花といふ事を

186 小山田のいほしろたへにかけてけり五月待つまの花のしからみ

卷十八雪

(石清水三百首歌合月前雪)

187 さゆる夜の月の空よりける雪はひかりのやかてつもるなりけり

卷十九星

(長承三年六月常盤井五百首)

188 うき木あれは星にも人はあひにけり恋路にかよふことのはも哉

雷

189 なる神の声をさめたりいなつまのひかりはかりそゆふたちの空

卷二十二野

長承三年六月常盤五番歌合野徑草深

190 夏くればまのゝをきはら繁り合ひて行来の人はこゑのみぞする

林

191 かせさゆるしけきはやしの松の雪久しくもあるか神やのこせる

卷二十三池

題しらず

192 大沢のいけの水くきたえぬともなにかうらみんさかのつらさを

卷二十八竹

長承三年六月常盤井五番歌合竹風晚涼

193 ふえ竹にふすとりの音もすゝしきは秋のしらへに風やふくらん

卷二十九柴

194 しはつ山ならの真柴にかさゝれてねらふ獵夫のたゆみなの世や

卷三十四神祇

(石清水三首歌合社頭松)

195 含か代を祈るしはみつかきやおひそふ松のいく千世かへん

卷三十六旅

(石清水三首歌旅宿風)

196 山ち行かりのいほりをとふあらしなれをそたのむたびの友とは

(3) 雑

無名抄

〔三位入道基俊成弟子事〕

五条三位入道談云、そのかみ年廿五なりし時、基俊の弟子にならんとて、和泉の前司入道経を媒にて、彼の人と車に相乗りて、

基俊の家に行き向ひたる事有りき。彼の人、其時八十五也。其夜八月十五夜にてさへ有りしかば、亭主もことに興に入りて、歌の上句を云ふ。

中の秋十日五日の月を見て

とやうくしくながめ出られしかば、是を付く

(197) 君が宿にて君と明かさん

と付けたるを、何の珍し気もなきに、いみじう感ぜられき。

古今著聞集

〔俊成最勝光院花見与或女房連歌事〕

皇太后宮大夫俊成卿、最勝光院の花見侍ける次でに、御堂あけさせておがまんとて預りを尋ねけるが、をそく来ければいかにか

さねていはするに、鑑かきをもとめうしなひてと答へけるを聞て、何となく口ずさみに

となく口ずさみに

(198) かぎあつかるもじやうの大事や

といはれたりけるを、こともなき女房の有けるが、打聞て取もあ

へず、

あけくれはさせることなきものゆへに

と付たりける。たはぶれにても俊成卿のいひ出したる事に、肝

ふとくぞ付たる女はなをおそろしきもの也。

(参考)

清輔朝臣集

俊成入道うちききせらるゝと聞きて我がことのはのいりいらす聞

かまほしきことを尋ぬとて

さを鹿の入野の薄ほのめかせ秋の盛になりはてず共

平経盛卿詠

左京大夫俊成卿打聞せんとして故刑部卿のよまれたる哥どもを尋侍し

かばつかはすとて

いへの風ふくともみえぬこのもにかきおくことのはをちらすかな

親宗集

五条三位入道子侍従定齋昇殿ゆるされたるときゝてよみて遣

あしべよりすだちそめたるひなづるの雲井しりぬときくぞ嬉しき